

號十第卷壹第

本眞の慈父を戀ひ慕ふ

「闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば、生れぬ先の父を想ひ、此の道歌は、一休和尚の歌と傳られてゐる。此の意は我等は今、人間に生れ出しも我が心盤が、何れより来りしとも知らず又、死して何れに趣向すべき哉を顧みず、闇より闇に彷徨ふ凡夫である。然るに先覺なる釋尊の教たる經文を聞いて初めて我等は、無明を父とし煩惱を母とし生を受けたるもの、其先きの迷ひ出でぬ昔の本眞如來の都に自性天眞如來と云ふ眞の父の在りますと明てよりの心と眞底に澄める靈が喚起されて運りに天眞のオヤが戀しくなりしと云ふ事である。



我等が教のオヤ

山崎 辨榮

報身如來は十方無量一切世界の諸佛神明の中心本尊に在ります。人間の肉眼にて見ゆる宇宙は天に日月星辰列なり地には一切の生物が生存して居る。報身如來は肉眼にては見るに出来ぬ。釋尊が初めて無上正覺を成じ給ひて佛眼を以て視給ひたる最淨最善の靈界を蓮華世界と云ふ。一切の諸佛賢聖の安住し給ふ處。其中心蓮華蓋に舍那圓滿(無量)如來、最も麗はしき相好、無量の光明を照らして普く十方法界を照し

給ふ尊體を報身如來となり、是れ法界一切世界諸佛を統御し給ふ唯一の尊靈體である。是れ大乗圓教に於てのみ明し給ふ尊體である。故に釋尊も亦一切の諸佛も斯の淨滿如來の指揮の下に一國の教權を授けられたる教主である。梵網經に我れ今盧舍那方に蓮華蓋に坐し圓照せる千華の上に復、千の釋迦を現じ、一花に百億國あり、一國に一釋迦在り、一時に佛道を成ず。此意はルンヤナ如來は光明遍照十方世界の念佛衆生を攝化し給ふ靈體にして即ち靈界の太陽に在ります。凡夫の眼には見えぬが釋尊が正覺を成し給ひて佛眼を以て知見し給ふに盡虚空徧法界を一切する蓮花藏世界の中心にルンヤナ如來廣大無邊の妙色身を以て一切諸佛の本佛として一切に照臨し給ふ。斯の如來の統御し給ふ千の世界に千の釋迦在りして又、一世界毎に百億の世界ありて一々の世界毎に一釋迦在りして各、其國々の衆生を教化し給ふ。その中尊の如來を圍繞し其の使命を奉じて各、一世界の一佛となりて其の世界の教權を掌り給ふ。千に各百億なれば即ち十萬億の佛士を統

(2)

領し給ふ中尊の故に之を報身如來を以て盡法界の世界なり。

報身の不思議

其れ奇特の法とは本、法身より生じたる人の靈性を開發し、煩惱の惡質を脱却し靈化して衆生の人格を根本的に改善し給ふ靈體に在りますと云ふ。云はば法身なる右の御手より播布せられたる衆生の佛性を報身なる左の御手に依りて慈愛の光明を以て心盤を長養し心盤の花を開かせ靈の果を底熟せしめて諸佛と等しき覺位と永劫の生命と圓滿なる靈格を成さしめ給ふ作用を掌り給ふ靈力である。無明生死の方面にある衆生を永遠の光明界に攝取し給ふ如來である。實に報身の奇妙さは此の垢障深なる凡夫の人格を改革して清き人と爲し給ふこと何なる不思議か之に如じ。法照禪師が謂ゆる瓦礫を燒じて眞金となすは是れ報身の奇妙である。

(二)

報身の不思議は佛智不思議等の作用にして例は太陽の光りが稻麥の實を成熟させる増上縁たる如く如來佛の相を互に視たり視られたり、或は悲泣し或は歡笑す一切の相相實は如來藏不思議の發現を衆生が阿頼耶識の色眼鏡を以て或は悲觀し或は樂觀す。何も人生の目的自覺せざる程は一擧の夢に過す。

極樂の淨土と現れたる方は即ち佛智の夜明けたる晝の世界である。故に娑婆と淨土とは處を同ふして凡夫のアラヤキにて見れば娑婆にて佛智の光明にて見れば淨土である。故に經に淨土に生るゝ人に胎生と化生とあり、彼の彌陀の淨土も娑婆と同じく人類の善惡の業から感したる世界と同じ理のものにて淨土の生を願ふものは淨土は佛智の顯現である真理に於て明かにしないから五百歳中胎生すと。若し淨土は全く佛智不思議不可稱智大乗廣智無碍無倫最上勝智の光明より顯現したる世界なれば凡夫が自己の妄識を捨て佛智を信じて光明の中に靈活する時はたとへば身は娑婆に在りても、神は淨土に逍遙する故に命終れば即時に蓮華化生して佛の知見し給ふ如くに佛士を知見することを得。去れば報佛の不思議を

智の光明は實に不思議である。報身佛の無盡の相好莊嚴身も亦、淨土の無比莊嚴の相も悉く佛智不思議の變現である。今吾人が現在肉眼にて現世世界と感して居る世界の淨穢苦樂の相は衆生が自分の阿頼耶識を以て各自が銘々に感覺して居る同じ世界に在りても動物見識の類とは人類の見つゝある美觀に對しても何の美觀はない。犬は犬の世界を感じ馬は馬の馬に感じて居る。人類は人類の阿頼耶識の色眼鏡を以て天地萬物を人間式に感じて居る。

全宇宙は絕對無限にして娑婆と淨土との極端はない衆生の阿頼耶識にて見れば全宇宙悉く娑婆世界にて佛智の光明が明けて見れば全宇宙悉く清淨國土である。同一の宇宙を佛智の明けたる人が見れば晝の世界にて、凡夫には夜の世界の方のみを經驗して居る。法身より受けたる佛性を具しながら未だ無明の夢睡めす、阿頼耶識を以て我とし、善惡の業に依りて苦樂の身を成じ生滅變化極まりなき現世界の一大パノラマの種々の變現衆生相互に有爲轉變の悲劇と喜劇と幻化

(3)

信じて明かに佛智を信じて光明の人と爲る時、大利を得ると經に説き給へり。吾人が此世に生れたる目的は那邊にあらう、大宇宙のオヤは何の爲に衆生を召しよる聖意であらう。其理の自覺出來ぬのが即ち凡夫である。經に諸の凡夫自ら智ありて明ひらく、生の從來する所死の趣向する所を知らず、闇より闇に彷徨して居る。去れば應化の世尊すら一度人身を受けなされて俗間に在らせられし昔は人生問題の爲には痛く煩悶し給ふた。竟に入山學道の結果として生死の究まる處不思議の淵源妙法の玄底に悟入して絶對界の内面秘密の寶殿を開きて無量光如來の聖意を體得す。即ち、如來の光明は遍く十方法界を照し念佛の衆生を攝めて靈化の妙用を施し給ふことを發悟し、茲に於て初めて大宗教法としての靈格を具備し給へり。

釋尊が宇宙中心本尊たる彌陀の光明に接觸し給へる内容の状態は甚深にして是れ佛の自境界、凡夫の窺ひ

(4)

測る所にあらず。然れども吾人をして自ら悟り給へる
妙境に誘導し給ふ本意の在ますことを信する時は此の
消息を汲むも亦、許し給ふ所ならん。

釋尊が絶対大靈其もの、内蔵に融合して神祕の奥室
を知見し給へる其の靈境は先にアラ、仙等が觀ておる
非々想天などの様な皮相なるものでない、全く無我眞
如の總頂に達し生死の源、罪惡の根底を亡し、金那
圓滿の内容、又我々入の神祕の奥に入ればそこに初め
て入道以來永く別れし本體の慈父と親炙して自性法界
宮に父と共にある身なるを覺り給ふた。之を、上正覺
を得たりとす。即ち無量光の顯現したる人格の意であ
る。こは永劫常樂の都なれば涅槃界と云ふ。即ち無量
壽國に永住するの意にてある。

大乘佛敎の終局の歸趣する處は無量光に攝化せられ
て無上正覺を成じ、無量壽國に生れて常樂涅槃を得る
にあり。

然してより已來釋尊は一切衆生に大宗教家としてほ
ゆるに彌陀の光明に攝取せらるべき念佛の法門を以

せず。殊座も譲らざりければ阿闍者はその無畏女が大聲
間の聖者方に對する待遇の甚だ法に稱はざるを明りて
曰く無畏よ汝豈知らずや此の聖者達は皆釋迦如來上
足の弟子にして大法を成就して世の福田なるを以、世
の衆生を慈みて故らに福分を植する爲に乞鉢を爲さ
れ給ふのを汝は今いかなれば起て迎へ敬禮して共に御
法を問はざるにやと詰問しければ無畏女は父の王に白
して言く大王よ四天下を領し給ふ轉輪聖王が諸の小王
を起て迎ひなされ給ふや否や、王の曰く否と、復た
父王よ頗る獅子獸王が小野干を見る時に起て迎ひるこ
とありや否や、王の曰く否と、又帝釋天王が餘の天
を起て迎ひ給ふや否や、あらず。女の曰く父王よ今妻は如
來大乘の深理を聞き菩薩の無上道心を發して無上の大
道に向上せんとする理想と志願とを有する精神的轉
輪聖王なり、去れば小乘の聲聞や緣覺などに親近（今
宗教的に云は）大乘の志を發す人は大ミオヤをミオヤ
と信じて聖意を自己の意として居るものなれば其志が
廣大である、世の總ては悉く同胞である、去れば凡

てす然しながら大宗教家としての釋尊も宗教的の模範
を示し給ふ時は彌陀の光明に攝取せられて靈化し成
佛し給ひたる佛身に於て一切衆生をして皆彌陀の光明
を蒙りて永遠の光りに歸すべきの眞理なるを教へ給へ
り。大乘佛敎の人生の歸趣の理は茲にあり。

佛典 無畏姫

阿闍世王の王女に無畏姫と云ふあり、端正無比にし
て賢明無雙、殊勝にも徳徳悉く備はり、年未だ二八に
して已に大乘の深義を解して阿耨菩提心を發せり、去
れば其心の廣大なること虚空に等し、四弘誓願を以て
人格を莊嚴せんとす、其理想の高尙なる其の志願の深
廣なる處に女子の大菩薩である。

或日王女は御父君の常閑に在て金寶寶履を著け心に
大乘甚深の妙理を念じて冥想觀念したりき。時に諸の
聲聞舍利弗等の大弟子方の來入するを見て平然として
起つて迎ひざるのみならず默然として住し共に問訊も

と同じくミオヤの道を共に進み行くて高尙な理想と
遠大な希冀を以て志願する信者である。彼の小乘の聖
者は山を移すやうな神通力もあり千里眼的通力もあり
他人の心を明かに讀み得る靈力はあり又、凡ての煩惱
を盡して清き心を有すと雖も去れど父王よ彼等は大ミ
オヤを眞にミオヤと信せずミオヤの聖意を我が意とし
て居らず眞にミオヤを愛樂せざる故に世の總ての衆生
を眞に同胞と思はず、どこまでも同胞の苦を苦とせず
同胞に樂を煩らて共にミオヤの光明理に手を携へて
未來際までミオヤの道に進み行くべき同胞ではありま
せん。父王よ何故に親しく問訊せんと仰られませうか
ども若し小聖者に親近しますと何時か夫れに同化せら
れて小さな心となりて自ら獨り解脱を得れば他を顧み
る暇がないと云ふ様になり已らば大ミオヤの道に進む
ことが出来ませぬ。故に問訊して法を聴かむと思ひま
せん。と白上げれば大王は去れども無畏よ、汝は大に我
慢にて無禮ではないか彼の聖者衆に敬禮せぬのはどう
へば女は白く父王よ父王も亦我慢に在ますや、何

にとなれば王舍城内の諸の貧窮者を迎へて禮し給はざ
るにや。女よ彼等は我が類に非ざれば我何ぞ迎へ禮す
べきものぞ、女は王に白く汝は知らずや諸の菩薩衆は
ミオヤと信せざる人に於て妻が同志ではありませぬ、王
は女に語らく、去れど女よ汝は知らずや諸の菩薩衆は
皆凡ての衆生を敬ふではないか、女の白く、大王よ
凡ての菩薩衆は凡ての衆生を悉く同胞とす、其同胞の
頭の中には佛を戴きて居る故に其の佛子の徳を崇ぶが
故に禮敬する、去れば妾も一切衆生を敬禮して其人々
のミオヤの子なる理想を育て、共にミオヤの道に進み
たいと思ふ故に、至誠に敬ひを生ずるのであります。

無畏女は大乘菩薩の志、高尙なる理想と遠大な希
望とを以てミオヤの子たる心を能く發揮したる女子に
て光明主義の人の理想的志意の人であることを茲に記
して讀者諸君に紹介する。

佛子の理想と志願は高く深かるべし。去れど又、常
不釋菩薩の德行に倣へて衆生を悉く中心より敬ふて謙
徳を養ふべきである。

ては全く會員御一同の自發的御發起に依ること乍ら此
の問訊賀様の一方ならぬ御芳志の籠れることでありま
す。而も此の計畫たる已に昨秋より着手せられたる事
であつて羽賀様御自身京都に在ては浄土宗管長並に黒
谷、百萬遍、淨華院更に東京に於ては大本山増上寺の
各御法主に願つて御眞筆の御下賜を願はれ、其他この
會に關係最も深き辨榮老上人は勿論其の法縁深き人々
には一々御案内せられてあると云ふ事です。不肯私の
如きも其の末席に列するの光榮を得たるも己に昨秋よ
り特に定められたる所、私が此程より此の地方に参り
ましたのも主として此の一周忌参列を中心としたる日
割であつて序ながら來たやうなものではないのであり
ます。此の點に對しては御一同に於て深く羽賀様
の心からなる此の御厚志に對して深き感謝の御心を以
て頂きたいのであります。尙、不幸にして辨榮老上人
其他の人々の御出席なきは上なき遺憾のことではあり
ますが、老上人も必ず遙かに今日此の集りに就ては心
からなる御回向あらせらるゝ御事と存じますれば、又喜
びの極みであります。又故淺井上人に於ても必ず此の
心込めたる皆様の一日の集りを上なく御喜びのこと、
思ふ時私も限りなき歡喜の心に満ちるゝのを感じます

◎故淺井上人の壹週忌 に參じて如來の慈光 を宣傳す

土屋 觀道

只今故淺井上人の御事蹟に就ては若菜先生並に賀
儀より詳細なる御話がありましたから、此の上私から
又、彼此と云ふ必要はありませぬ。夫に大分時間も
立ち又、本日は殊更に寒さも然いやうですから、私は
直に如來の大慈を宣傳したいと存じます。之れ日頃か
らの私の生命であり主義とする所。又、故上人の御本
志にも叶ふことかぞ存するからであります。

併しながら其前一寸申上たいことは今日の集りは其
の人数は極く少數ではありますけれども其の内容の純
潔にして清淨なる又、如來を中心としたる最も意義あ
る集合であること云ふことあります。夫は故上人に最
も縁故の深きばかりの集りて全く慈光中心の法事で
あるからであります。次に又、此法事が營まるゝに就

尙私に故上人の知己を得たのは彼の謙徳極まりなき
笹本戒淨先生の御紹介に依り又、私が此の北越に縁を
結ぶ様になつたのは全く故上人並に新湯善導寺上人の
深き御同情に依ることあります。又故上人と私の
信仰關係並に近來各地に勃興し來れる三昧會等に關し
ては最も深き關係の御話もありますが今は夫等を述ぶ
べき時間もない事故直に、慈光宣傳の問題にはいつ
て行きたいと思ふのであります。

一、宗教の根本義

一體宗教と云ふものは如何なるものかと云ふに文明
人の中にも亦、如何なる野蠻未開の人々の間にも發見
さるゝ所の事實であるにも係らず、其の定義問題にな
りますと、未だ明確なる判定が下されて居ないのであ
ります。去れば宗教とは如何なるものか判明しないか
と云ふにさうである。神と人との關係、如來と衆生
との關係であること云ふ事は、判りきつて居るのであり
ますが、然らば神とは何ぞや如來とは何ぞや。又、夫
等と人々との關係如何ん。等と理性に訴て之を明かに
しやうとする中々判然とせぬのであります。併しな
がら其もその等であつて宗教とは吾人の絶対歸依の對
象となるものであつて吾人の全生命の出發點であり、

又、其の生命の歸着點でありますから信仰ある人々は最も判然たるに保らず最なる理性一方で捕るもの出来なものであります。去ればとて又、感情一方面的でもない又、意志的活動でも満足せらるべきものでもないであります。謂はば是等の一切の本源たる人生要求の歸依所たる一大尊靈と自分の關係であります。

茲に私が又は衆生或は人間と云はずして自分と云つたのは最も意味ある云方であつて人とか衆生又は人間と云ふ抽象的な言葉にあらす、直に各人各自の自分と自分共のもの、絶対歸依者たる如來との事實的關係に付ての問題を中心とせんとするからであります。之れ主として宗教を一種の概念化せずして真に宗教其ものとして事實の上に之を捕へしめんとする私の立場からであります。故に現に各自に宗教の事實に觸れざる限り智者も學者も眞實の宗教は如何に知ること出来なものであります。故に私の御話には宗教哲學でもなければ又、宗教講話でもない。皆様と私共との上に現實の上に事實として現はるゝ神と吾々の直接關係の問題に就ての實観であります。

二、人生の目的と人生の歸趣

一には永生不死の要求である。
二には無限向上の要求であります。

前者は亡びざる生の要求であり。後者は價値的生活の要求であります。然るに此の二つの問題は常に吾人々類の要求する所なるのみならず、生きとし生ける生物の等しく要求する根本の要求であります。亡びざる方への要求は一切人類の本質的要求であり、常によからんとする向上の要求も之れ又、人類の望みであります。然るに吾人は斯る根本の要求のあるにも係らず、果して此の要求を根本に満足することが出来るか。諸行は無常である。生あるものは必ず死す。若し自己を萬象變化の中の一として見來る時、どうして自分のみの不死を免るゝ事が出来やう。自分が死ぬるこの此の事實に氣付いた時の驚きを怖れては確かに人生の一大革命的自覚であります。此の驚かき血の通ふ胸に脈打

さて只今私共が此世に生存して居ると云ふ事だけは明かに承認する事柄であり如何なるも死後の問題に對しては單なる現在式では如何なるものであるかを知る事ができないのであります。自分は何處より來り何處に逝くべきか又自分は何をなすべきか、人生の意義云何。吾は何故に生れし何故に死すべきか、自己其のもの並に自己の周囲を望め來る時、自我と非我との區別を知覺す。初めの程は此の世に生れて來た何事も知らざりしもの、漸く長するに従つて自己の周囲の存在を知り頼つては又、自己の存在を知る。母あり父あり兄弟姉妹さては一家一國社會各國の存在は申すに及ばず、更に進んでは山川草木蟲魚の類より日月星辰の運行よりやがては宇宙の絶大無邊なる、或は事物の存在せる小は小より大は大より大に時間空間に亘りて此の萬有の嚴然として存せるを知る。此の間にあつて自分は如何なる位置にあり云何なる意義を有せるか。今まで爲し來りし事柄と之より爲すべき將來とを考へ來る時始めて眞面目なる人生の意義を觀し來るのであります。我とは何ぞや此の肉身を我とすべきか此の心を我とすべきか、普通に思ふ身心は是れ我が身吾が心に過す。然らば我かと云ふ、我とは何ぞや、之

つ此の私が死ぬと現に只今まで生きて居た父が死んだ母が死んだ又、友が死んだ、妻が死んだ、子が死んだ吾々自分此の病氣が癒すに死ぬ。否、よし病氣が無くともやつぱり死ぬ。何故に我は死ぬのである乎。何となく死ぬのは厭である、然し大自然の中に生きつゝある吾人は願つて一度は來るべき此の死を免るゝ事は出来なないのだ。でも死ぬのは厭である。やめても此に肉體は死でも自分は死にたくないではないか、之が私共の實際の要求ではないか。さればとて誰も死なない殺されても死なない、かつたらどうであらう。之れ又、困つたものである。踏まれても蹴られても、打たれても切られても死なない、老ても死なない殺されても死なない自殺せんとしても死なない、どうして死なない、そして一方に人がどうも生れて來る。火にくべても死なない地球一がいになつて死なない、何千年も何萬年もの人々が皆死なない、之でも亦困つたものである。さればとて私死なない、永久に死なない、之も亦いかに、さればよき加減な所で死んでもよき様な氣もする。然し其實やつぱり死ぬのは厭である。亦親しき人に死なれるのも厭である、殊に亡びるのが厭である。茲に於て己に生死の二つが厭である。其他生あれば老も來る

又、病氣もする、願くは私は生死ない天地が欲しい生あればこそ老病死もあるのである。生あれば死がある。生死は相對の事實である。願くは生より生に死のない生が欲しいのである。死を豫想せぬ生に死の世界が欲しいのである。此の生死を離れた永遠の世界が欲しいのである。ここに初めて吾人の理想の天地が要求されるのであります。

第二には價値の生活である。之れ無限向上の要求より來る。吾は死ぬのが厭である然し乍ら只、生きてよへ居れば夫は何事もせずに生きてさい居れば夫でよいか。去ればとて只働くのも厭である、目的のない働きは無意味である、只一種の餘餘ない働くと望みなき人生程上なく味氣ないものはない、去ればとて死の程の心にもなれぬ、去ればとて限りなき望みもない、世に之位つまるゝ人生がどこにあらう、之に反して私共はそこに無限の望みある世界が欲しい、喜びに輝く世界が欲しい、斯くも望みに輝く時限りなき力も喜びも自ら湧て來るのである。眞正の活動あつてこそ、そこに生存の意義を感ずるのである。一々の仕事皆來るべき問題に向つて望みの中に遂行するるのである、そこに無限の楽しみも出て來るのである。價値の生活とは

うであります、念佛を吾がものにするとは相續上最も必要な條件でありまして、吾がものとなつた念佛なくては念佛の眞意を見出すこともできません、眞に念佛が我が物となつたら厄介だともイヤだとも思はず、申します式で申すのでなくて、申さずに居られぬから申すことになりまして、宗祖が「われたとい死刑に行はれども之の事云はずばある可らず」と念佛を生か命となし玉ふた邊を伺つて見ましても、宗祖は念佛が吾がものになつて居たことが何はれまします。

念佛が吾ものになる——と云ふのはどんな状態でありましよう、私もまだ探險に乏しい者でありますから確かにば申されませぬけれども、先づ念佛に趣味を持つことが第一ではないかと感じます、食べ物でも數々食べて其味が分つて參りますと食はずに居れば、酒好きの酒、煙草好きの煙草も同じで、一度其味を噛み出したらなかく止められるものではありませぬ、念佛も心を如來の一境に注いで數々繰りかへして居る内には三昧境と云ふ程までは進まずとも、必ず味が分るに違

斯る望みの生活、人生の最大目的に向つて私の全心が統一せられて一大活動の中に行はれつゝある事を云ふのである。何故か吾人は斯る望みと喜びとの力の生活を望んでやまぬ。(未完)

◎法話の一節

中川 佛子

吾がものと思へば輕し難の雪。何んでも吾がものならなければ持ち重りのするものであります、手荷物一ツ持つにしても、自分のものだったらちつとやそつと辛抱もできますけれど、他から依託されたものは同じ斤目のものでも大へん持ち重りがして途中で捨てたくなるものであります。

念佛もそれと同じで、單に人からすゝめられたから説教で教へられたから、日課を誓つたから、申さぬわけにもゆかぬからと云ふやうな他動的なのは、全く事付かりもので持ち重りがして嫌味がさして參ります、多くの念佛行者の中には隨分之事付かり式があるや

ひないと思ひます、少し死でも趣味を感じて益々勇み進んで居ましたら必ず三昧状態に入るものと信じまころか、止むに止められぬ程の吾がものとする事ができると思ひます、一藝一技に達するでも相當の修練を要します、無量劫來の思ひ出を叶へやうとして下さるこそやと呼ぶのでありますもの、ちつとの努力は要するものであります。イザ之れから共に俱に聲を揃へて勇猛に進みましよう。

六月下旬筑前飯塚より八木山の嶺を自働車にて篠栗西島翁宅へ山崎上人の御越しあらせられしを待ち受けて

ひたまにまじしいありかひかひの
たかきすがたをあふく今日かな
尊き御法を受けはべりて
法の友みなひとすにみほどりの
み名をどのうる身とぞなりける
世のうきに心はいつもさみだれの
はれてうれしき南無阿彌陀佛

篠栗 光明會員

山崎上人のお別れを借しみて
篠栗 常子
たひ衣かきわくして法のみち
いやすくみゆく袖おしけれ

○小島尊宿の質疑に
答ふ

山崎 辨榮

一、法身を人格者と見る事は如何かとの質疑に就ては是は多くの佛敎者の疑ふ所である。然るに愚者は法身佛を人格者に信すべきやうに一般の佛敎者に承知せられんことを冀すのである。

就ては小島尊宿よ、餘例なれども宇宙は本、一體なれども科學的、哲學的、宗教的の三面の宇宙觀ある事は御承知せう。佛敎の學者中に哲學的と宗教的の両面を混淆して居る方が多くある即ち、真如と法身とは同一の實在なれども甲は哲學的の名にて乙は宗教的の表號である。哲學は實體を理論の対象として其の知識を得るを目的として觀る故に、實體と宗

であり、絶對的の自意識である。人格的精神である。ヘーゲルの神は佛敎の法身ビルヤナ福一切處の神と同じ意味である。斯様な次第にて法身を人格的に見るのは宗教的である。法身佛を實體と觀ては哲學的に混交したる觀方である。
尚、佛敎者の中に哲學と宗教との混じたる見解は、法身は實體にて報身は人格的であると法身に對しては哲學的に觀て報身に對しては宗教的に觀て居るが即ち誤りである。夫では終始一貫して居らぬ。若し報身を宗教的に觀るならば法身をも宗教的に觀るべきである。また終始一貫して哲學的に觀るならば本、真如より隨緣の衆生なれば我等が自己の根底に悟入して本の真如に融入する時は即ち、佛なりと觀る如きは一貫したる哲學の見解である。
我が愛する小島尊宿よ法身を人格的に觀るのは宗教的なことを諒し給へ。(以下次號)

大智慧大慈悲の如來を
信ぜよ

教は救を求むるの客體なるが故に自己の本源なる親としても亦、終局の救済者としても人格的に觀ざるを得ぬ。子なる自分が人間なる故に其親たる法身は人格的に觀せざるを得ぬ。哲學的理論の対象としては真如と云ふ實體に觀すべきも、宗教の信仰の対象としては人格的に觀せざるを得ぬ。既に法身と云ふ、身とは人格の意味である。加之法身佛と云ふ、更に密教ではマカビルヤナ即ち大日如來と名けて人格的に觀ておる哲學的では實體として取扱つて居るが、真如佛とか又は實存と名けて居らぬ。世間の學者は實體を哲學的と宗教的との觀方を能く了解して居るけれども、佛敎者には解らぬ方が多い。福來先生も云はれた。私は宇宙を絶對的に對する觀見を例せば日本帝大に教鞭を執られたケーベル博士が神は絶對的完全なりと言ひ又、神は絶對的人格なりと云ふも畢竟同じことである何となれば前者の概念は亦、人格の概念をも含ひに依てゐる。非人格神とは我等の有限なる人間の本質の最高性質さへも有せざる如き神である從て人間よりも貧弱なる神である。

ヘーゲルが活ける神の遍在の確信は神は絶對的主體

京都帝大 中井常次郎
學部講師

五歳で死んだ長男の一郎は年齢不相應に丈高く、能く肥えた見事なる體格であつた。併しゼンクツの氣あり、母は之を治してやりたいと念じて明日より靈藥を取つて服用させて居た。去年の春、今尚その藥の大部分はかたみの如く残つて居る。或、で知り合はれたつた某夫人から扁頭線を切らば見事に治る。夫には大坂に濱路病院として天下に冠たる専門家が居ると紹介状を書て呉れた。母は其人と其醫者を信じ切つて一郎に手術をして貰ふことに定めてしまつた。而して紀念の爲とて去年の今日家内連れて寫眞を採り過ぎたる六月二日に母に連れられて大阪へ行き小兒に過した手術を受けて夕方歸つて來た。能く忍んで手術して貰つたと聞き父は一郎を賞め慰めて其夜町へ出て汽鍬を具へた小さい汽船を買つて來て興え流しに水をたゝへて走らせ病床の彼の喜びを見え父は満足であつたことを追想すると胸の痛みは新しくなり斷腸の思ひがする。如何なる未來を持つたかも知れぬ一郎を苦しめて二十五圓の手術料を拂ひ死に至らした、負傷を買ふ爲に大阪まで行つた様ものであるが、之を思ふと全く親

の不明に歸するのである。手術後三度三日目に四十度に近い熱が出て大坂病院へ連れて行つた、而して入院することになり十九日に敗血症で死してしまつた。知人の醫師にきけば三日目の發熱はメスの不潔と想像されると云ふ、某氏の話に依ればあの病院は手術の不潔であるが、そんな處へ持つて行つたもので、又或人の如きは丹毒を買つて來たかと恨めしく語つた。併し私は醫師の不都合や親の不明や小供の死は世間に入りふれた出来事であるから問題にして居らぬ。然し一年過つた今日自分が胸をえぐるゝまで追憶を新たにさせられたに就ては何か大なる理由があると思ふて考へて見ました。

一郎は此の不完全なる親を疑はず平たく死にまで導かれたる手術を受けに紅葉の様な手をひかれて母と共に大阪へ行つた、而して手術中驚いて「お母さん治る？」と心配らしく尋ねた時母は醫者を信じて「きつと治る!!」と答へた云ふ。天眼も宿命運も開けぬ盲目同様な父母、一生造惡の凡夫なる親に都てを捧げて信賴し死に就た一郎の信を思ふては吾等如來を疑ふ事であつて完全無缺の慈愍を以て衆生を愛し導き給ふの

さびしくは御名をとなへてなぐさめよ
唐澤山の秋の夕暮

高き聲で唱はれた後又御端書のスランプの日附と思ひ當る日或即待を持つて唐澤山で待つて居た日を昨年のお口誌から知り得て思はず
「上人に濟ぬ事をした」
と獨言した後考へ込んでしまつたが暫らくして
「南無阿彌陀佛」
と稱へた、そして同じ御端書の中にある
あみだ佛に染むる心の色に出では
秋の梢のたぐひならまし
との法然上人の御歌を口ずさんだ。

偶感

大竹 一
今や物質文明の潮流は我が日東の天地に漲り其の餘弊は滔々として吾人青年の心髓をまで浸さんとし、外來思想の黒手は吾人をして奈落の底に沈ましめむとす

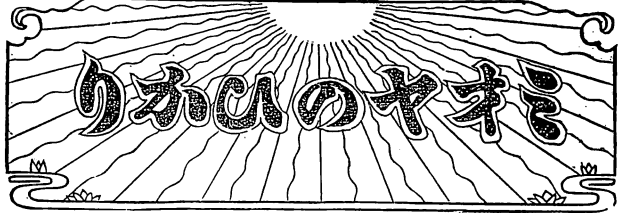
である。何で此の御親にたよらぬのであらふ。不幸の子と云ふべきである、私は一郎の死を考へないで其の信頼心の強くして純なること彼の一郎の如くありたいと思ふ。一郎は不幸にして死んだのは親を信じたが爲でない、親の不完全、不明の爲である。然るに吾等のみおやは完全である。其の大智慧大慈悲のミオヤを疑ふの罪深くして悔の大なるべきを知らしめんが爲に一郎は吾が心に釘を指して反省を促されるのである。一郎は己れ徳性と爲つて若き親や其の知己友人の爲に「み親に縫れ」と自ら手本を示して叫んだのであると私は深く信じて居る。

告白

高橋猪久次
役所から査過歸つて來た私は例の通り午睡して自分の専門の讀書に就つて居たがよと、辨榮上人から頂いた「自覺の曙光」を讀んで居ると……又上人から賜はつた御端書の事を思ひ出して机上の本立の中から取出して私に給つた御歌

國家運命の鍵を手にせる吾人の前途や晦暈なり。多年多端なり。見ずや人心は生存の意義を投却し生命の價値を認識せず、徒らに本能欲を逐げん事にのみ急にして絶對に對しての尊信なく總ての根柢を失へて昏迷の中に生を奪ひ、彷徨極まりならんとす。此の時にあたり、山崎上人は斯く暗黒裡に轉々しつゝある同胞を救済して光明裡に導くべく、老嫗をも厭はせられず東奔西走日も之れ足らざるの有様なり。此の宣傳、此の布教、精神的に麻痺せんとするの危機に逢着しつゝある同胞を覺醒せしむるを得たるの一大鐘聲なることを青年諸氏よ、機會もあらば上人の温容に接し、慈教を聽取して無量の靈福を得て人生の安定を圖られんことを。

大正九年八月十五日印刷 (毎四ヶ月)
編輯兼 村禪定
發行人 中村禪定
印刷人 秋場熊太郎
發行所 千葉市京橋區本八丁五十五番地
秋場松戸教會所
振替東京四九三三八番



號一十第 卷壹第

一リの大ミオヤを戴く處の 世の同胞衆に告ぐ

我等は人の子であると共に如來のミ子である。人の子であるから一切動物欲の上に我欲を以て有ゆる罪を造る。即ち地獄を造り餓鬼道を造る動物である。日々の己が身と口と意の所作を反省する時は、地獄の火に焼れ餓鬼道の苦を受べき外にゆく道なきものである。然れども其心の奥底に潜める靈性の具ふあり。また大ミオヤの大慈悲迷子を救れむの慈悲心より欲主稱頌を現はれ、本地の慈悲を示して曰く、世のすべての子等よ、至心に我を信じ我を愛し我許に生れんと欲して只管我名を喚びて我を頼めよ、必ず光明の中に生れ更らんとその惡業かたじけなし。例へば人の子たる此肉體が生れて初めは母の顔さへ見えぬものなれども、唯啼聲を便りに母の乳房を咄められて成長せし如く、佛の子たる我等は大ミオヤの慈悲の面影さへ見えぬ赤子である。唯ナムアミダ佛の啼く聲に如來の慈悲に省まれて靈に活き御子の徳を成長れる終りには必ず佛に成るものと信じて一に念佛する時は必ず如來の御育てを被りて、光明の中の人となるを得べし。仰き願はくは世の同胞衆よ、共に大ミオヤの慈光を被ひ、同胞共に相携えて大ミオヤの道に向上せんことを祈る。



◎我等の教のミオヤ

山崎 辨榮

念佛とは佛と離れぬこと。念佛は大乗佛敎の宗教的意識の最大事である一切萬行はより出づる。一切諸佛は、此念佛に依て成佛せしと經に示されてある。念佛とは念ずる人と如來と共にして離れぬ意義である。念と云文字は人と二と心に於て即ち二人離れぬ心を云ふ。世に念頭に繋ると云は、自分の外に他に或物に對して其胸臆に往來して離れぬことである。例へば孝行の子が常に其父母を憶ふて念頭に捨てる如く、人は本心に愛する人をは忘れんと

しても忘れられぬ。時經に中心之を嘉みせば何の口か之を忘れんと云やうな場合に、終始其念頭に在て離れぬを念と云ふ。今念佛とは自己の心裡に此世後世を通じて生命を献けて信愛する、彌陀尊を常に念頭に戴きて、唯れぬを念佛と云ふ。即ち佛念心の心である。絶對的に信愛すべして超て信愛する如來を、常に頭に戴きておることである。觀世音菩薩が御頭にいつも彌陀尊を戴きて在すのは、其意味を表徴したのである。故に觀世音はすべての念佛者の先達にて念佛する人は誰人もかやうに爲れとの模範を示しなされたのである。觀音菩薩の頭(精神)には彌陀如來が威神光明赫々として、照照し玉ふことを信じなされておる。其胸の裡は常に彌陀の慈悲に充たされたを。何人も彌陀の慈悲に満たさるゝ時は大小はあれ觀音と爲るのである。觀音の念頭に永しに彌陀如來が離れぬ。彌陀の光明に變化せられた人格が即ち觀世音である。今の念佛者は生れた許りの觀音である。念佛者の心頭には最も尊き彌陀尊が常に眞正面に在ますことを念ふ時は、

(2)

縦今肉眼にて人の面貌を見る如くに視へぬからとて、心眼の前に威神光明の如來が實在するを念する時は、肉の形に見ゆる人よりは優に尊く有難く想はるゝ。本より眞の如來は肉眼にて睹るものでない。觀經に如來は是れ法界身に一切衆生心想の中に入り玉ふと夫を聖體は、法界身とは肉眼にて見べきものでなく意識の對象にて即ち心眼にて觀べき尊體であるを釋された。

如來は本來大靈體にして實に一切の處に何れの處にも在まざる處はない。但し人の信心の鏡が明かならざる爲に影現せぬ。如來は靈體にて色心不二である。一方より見れば、大智慧の光明として徧く照り渡れり。また一面より何と云はれぬ麗はしき妙色相好身と現はれたれば、故に衆生の一心に念佛して信心の鏡だに明かになれば、或は麗はしき相好身と現はれ、或は大慈悲として有がたく感ぜらる。經に衆生信水澄む時は佛日の影映る。如來は常に念する人の眞正面に在ます。但自己の心水が濁りておる故に分明に現は

淨いものでない。毎日胸の中に往來する念は貪欲の餓鬼腹患の地獄愚癡の畜生の心を以て塞がれておるでは有りませぬか。宗教上より云はゞ人間の最も貴重なるものは自分の心念の向け方と勤き方のいかででありませぬ。地獄を造るも佛を造るも、日常の心頭、勤らきを本と爲るのであります。そこで衆生は本來心の奥底に佛性を具有しておられけれども未だ鶏卵の如き物なのである。爰に於て此佛性の卵をあぐりて佛子と爲るのに唯一の法は念佛ばかりである。念佛とは佛を念ぶ心なのである。我等が口にナムアミダブと御名を呼ぶ時に、心の眞正面に最尊き彌陀尊が威神の光明赫々として照らし慈悲の尊容を見せ給ふと想ふ時は、いかに我が浅聞敷心も、自づと正しくせざるを得ぬ。實に我らは弱き物、自分の心のみでは闇の中に罪を造る外はなき物である。唯神聖なる如來を念する時にのみ初めて佛心我に來りて我心と爲り玉ふ。如來は念佛者に對して増上縁と申して非常の大なる力を以て助け玉ふ。例へば我らは或縁に觸れて勃然として忿

れぬ。信心の水さへ澄淨む時は必ず明に映り來る。然らばいかにせば信心の水が澄むやうに爲ることになる哉との問題が起る。是は佗なし、唯一心に念佛して心に相續し、念々に佛を念して不斷なる時は、必ず信心の水澄みて如來は我心水に宿り給ふに至る。經に如來光明威神功德を開て至心不斷ならば心の所願に隨て光明の中に生ずと云も其意義に於ては同一である。讀者諸君よ諸君の日常の胸臆に多く往來しておる物は何物であらう、どう云ふ事か常に念頭に繋つております。あなたを誘ふて高く高く清く清く仰ぐも畏き計りに向上させるやうな事は有りますが、若し念頭に、彌陀を離れたらば貪欲五欲の想のみで有りませぬか經に一人一日の中に八億四千の念ありて、念々の所作皆な是れ三塗の業と説玉ふてある。そこで未だ信心の光明を得ぬ間は日々に関の裡に三塗の業を造りつゝあるも夫が分るのである。いかいでせう諸君、元來人間の生れたまふの心は本劣等な本能的な動物性なのである。之に加ふるに五塵六欲の塵埃に惹かれた心は實に

(4)

を起す時にフツと氣づきて佛を念する時、尊き如來は大慈悲の笑顔を以て我の前に在ますと念はるゝ時はいかに我が忿怒も、自から和らがるを得ぬ。また我等が事に依りて悲しみに耐えぬ憂しさにたまらぬ折も口に御名を稱えて大悲のミオヤを想ひ奉つるとき何と云はれぬ有がたさと歡びとが胸の中より湧出し、無限の慰安を與られる。實に何なる事にも増上縁と云ふ強き力を以て助け下さる。我らは弱き凡夫である。必ず大悲のミオヤを離れてはならぬ。其大悲のミオヤが我が念頭に往來して我を助け玉ふ其心の表現が即ち稱名の聲である。其稱名の聲を發する心の奥には大悲のミオヤが在ります。是を念佛とは佛と自己二人にて自己心中にいと尊き一りのミオヤの在りますことと申すのである。

(3)

自づから全身が暖かになる様な気がする。あの火鉢の中の真紅な熱い火がいかでせう、未だ火鉢の中に入らぬ前炭箱の中に真黒な而して冷たい炭で在りし折は、何人も顧みずもなかつた。若し之に手を觸れば、意地悪に手に黒く染つく、されば誰人にも嫌はれる性質を持って居た。然るに其れが一旦火鉢の中に入りて火と結婚して相互に抱擁して同體一心とも爲つた後には不思議では有りませぬが性格が丸で一變して忽ちアノ真黒な面は變じて春の彌生の桃の花よりもつと紅の色が爲り、元は愛嬌のない冷たい炭が今では非常な燃つく様な愛嬌が爲りて、而していかに高位な方にてもまた卑賤な者にも分け隔てなく同じやうに暖かためやる。されば何人も其温かなる愛嬌と同情とには引つけられて、手をかざしておるとさうすると不思議な事には今までは蒼白な顔をして指先のかちけて居つた人も忽ち元氣が復活して顔は紅を催し指は自由の動かしきを作すやうに爲る。また元は炭には冷水を沸す力は無かつた物が今は冷水をも忽ちに沸湯と化し飯をも有

ゆる料理をも勇ましく煮あげる能力を持つやうになる。さればこそすべての人に敬愛せらるゝ物となる。諸君よ私共の胸の全部を占めて居る煩悩は炭である。直に腹を立てるネヂケルレヒガム取越苦勞をする、また食はる實に有ゆる罪障を持って居り而して我れがくどいガツ張りて居る、自分が意地の悪い癖に若し他人が自分に対して悪くせぬとまた親切にせぬと直に不足に想ひ、自分他人に對して至も親切や同情の暖かい冷たい私共の心である。若しも手を觸れば直に黒く染つて如くに私共は他人の悪い事を人に聞かせ悪影響を他人に染つけやうと爲る氣分を持つて居る。實は私共の心は煩悩の自分勝手な仕方のない奴で在つた。然るに私共の煩悩の炭に、彌陀大悲の火が燃つく時は忽ち心に心が一變して心の色が紅蓮花の如くなる。されば經に念佛する者は人中の妙好人最と美しき蓮花と譽たまふ。念佛して彌陀大悲が我らの胸中に燃つく時は有がたさと歡喜とがカン／＼と燃あがり、實に歡喜溥潤の狀態と爲りて燃ゆる心念の能力である。經に斯

光に遇ふ者は三垢消滅し歡喜勇躍を得るは是である。また炭の動かしに煮焼の動かしを爲す如くに如來の恩寵に充され感謝の念に動かされて日々の所作も勇ましく動らけるやうになる。火より蒸氣を發して非常な力を爲す如くに、彌陀の恩寵の火が我らが心念に燃つゝある時は人格が一變する。身も心もすべての形氣の惡質が靈化して如來の聖意を自己の意と爲し、慈悲に同化し親切な心を以て他人に待し得るやうに爲る。然して見れば我等が煩悩の炭が有ればこそ如來の御慈悲が燃つて居る、如來の恩寵を理はず器械と爲るものとすれば、我等が煩悩とて決して捨べきものでなく唯慈悲の光を得て慈光の燃ゆる心念と爲ればよいと信じます

爾如何にせば慈悲の火が燃つくぞ
我等が煩悩の炭に慈悲の火が燃つきさへすれば、忽ち心に心が一變して、昔に換りて惡にも強きは善にも強きとの諺の如くに人格は一變するとのことは今は疑はじ、然らばいかんかには我らが煩悩の心に慈悲の火が燃つくべきとの間に對しては、こゝが諸君に御勸め申す、肝心な事である。若し火鉢の炭に火を燃んに燃つかせんとする時は、團扇とか火吹筒を以て酸素の風を輸りつける。而すと初めは微少の火が漸々に燃つきて熾かに爲りゆく如くに、念佛とは如來の慈悲の火が我等煩悩の心に燃つくのである。如來の慈光の燃つくのは我等が心である。夫に口に稱名を唱ふるの何の爲であるとなれば恰も火吹筒で煽り立て、酸素の風を輸り込むやうなものである。但し煽り立てるのも炭に火の燃つかせる如くに念佛の心を發す爲である。彌陀の慈悲の光が我等の心に燃つく處に念佛の眞意が存す。例へば幼稚な子供が親より命ぜられて汝此火鉢の炭を火吹筒にて吹くよと云ふので初足らない小供は火を燃えつかせる爲ともしらぬ唯吹けばよいと思つて火の消え失せて居る炭を吹立てる如くに念佛さへ申せばよいと思つて口に稱名を唱へて居ても、心には彌陀の慈悲を離れて居ては無意味である。念佛は佛念の心にて常に心佛を念じて離れぬことである。されば何人も決して救ひを受えられぬ者はない。世に私共の如き

— (6) —

— (5) —

煩悩の強きは念佛しても駄目である救ひを受得られぬと自暴自棄し玉ふこと勿れ。真黒な煩悩の炭なればこそ慈悲の火が燃つくのである。灰の如きはいかに白く淨いからとて灰には火が燃つかぬ。私共の煩悩の炭は本より彌陀の慈悲の火を燃やす爲のものと思へば還て轉悔改過せらるゝでありませう。念の字が二人の心とは炭が獨りではなく火と一體と爲りてこそ斯は大きな働きを爲す、我らが心は一人でなく彌陀の慈悲と一體と爲りてこそ非常な力をも得而して勇ましく有難きと歡びとこの燃れたやうな信仰心と爲る。日々熾かに燃やす石炭の火力なる念佛にて日々に眞善界の淨土に向て進行する、究の如きの人生の行路は樂しくして且つ前途の光益明かである。

聖徳太子の傳

太子は我國に於て靈の光明を以て國民の精神を關の中より救ひ出せし神人である。若し夫れ我國にて太子が佛教の光を以て人の心靈を照すの道を開かざりしかば實に幾億萬の生靈は永遠の光を得るに由なく、闇に間に迷ふて出離の縁あること無きや疑はじ。殊に太子は西方淨土より來生してすべてをミオヤの光明に誘引給ふ權化の聖者である。光明主義の首唱者である。さればミオヤの光明を仰ぎて光の生活を希ふものは、太子の行傳を知る可きである。茲に二三の御傳に就て太子を諸君に紹介せん。

には御胎内にて何か物言ふ聲するを聞き給ひしこの事である。
明れば敏達天皇の二年正月朔日に皇祖御遊興の餘り宮中を巡りて廣の戸口にて遙かに御産に臨まれて覺えず玉の如き皇子を産ませ給ふた。時に當りて赤黃の光が西方より來りて産殿の外に照り輝きければ天皇も奇異の想ひを爲し給ひぬ。太子は凡そ御胎胎十二ヶ月にして御生れになつたと言ふ事である。禿りければ猶御驚き抱きて殿に上ると、又太子は生れて四月にて能く言のたまひ、又人の舉止をも知り給へりと、又其御體嬰其た香ばしければ抱へ懐くほどの人皆奇しき瀝り香は衣に染りて數ヶ月の程滅えざりしと。
三歳の春三月御苑に桃花の天々々々吹句今朝 父の帝は妃と共に苑にて逍遙し給ひ太子も嬉母に抱かれて從はれしに、帝は戯れに太子に問はせ給ふやう、汝は彼の麗はしき桃の花とまた緑波なる松の葉とを孰れを好み賞づる哉と、太子は、兒は松の葉を、と答へらる。是は何故ぞと問給へば太子答へて、さればよ、桃の花

は一旦の榮なれども松の葉こそ百年も常に變らぬ故なり、と曰まければ父の帝は深く感じ喜び給ひける。
四歳の春太子は他の少き王子等と父の帝の殿中に集ひ遊び互に戯れ合ひ果は團ひ叫ぶ王子もありて頗る噪がしければ父は之を制せんとて頓て御手に答を携へ喚び召されけるに他の王子たち驚きあはて、孰れも逃げ隠れたるに太子は獨り残り居て衣を脱いで御前に進み出でければ帝は怪しみ汝は何と逃げ去らぬぞと問たまふに太子は容を改ためて啓すやう、罪を二親に得ては天に階かけても昇るべからず、地に穴うちがらても隠るべきにあらず、故に自ら進んで答を受け罪を謝せんのみ、と宣ひければ父の帝も妃も今更らに太子の爲人尋常ならぬに感じ給ひ爾後は更に意を注ぎて育て給ふと。
太子五歳の露父の帝より八級を授けられし中に殊に論語を好まされければ一日父の帝問給ふやう、論語の中には何事が語であるかと、太子答へて、唯仁の一字を説きてあり。父の帝、しかし論語は異國の書なれ

— (8) —

— (7) —

我が神の道に遠事なき哉と訊へば太子は、東西道を異に爲は一方は夫れ天外ならん哉と答へければ、父の帝意々々の聰慧なるを歎こひ給ひ筆墨を授け書法を學ばしめ給ふに太子悦びて之を習ひ給ふ事日別に千餘字、三年の後王右軍の書を學びては其の骨髄に遠せり

聖年太子六歳の冬十月、百濟國に遣はし、大別王等歸り來りて經論及び律論、禪師、比丘尼等を將ひて朝に献じられたるを難波の大別王の寺に安置せられぬまた此時に遣佛工造寺工なども將來られて是より大和難波等に寺を建立するもの漸く加はりて太子は工造誘導の端を啓いた。その翌年百濟國よりまた數百卷の經論を献じられた。太子は父の帝に請ひ天皇に奏して是らの經卷を繕き香を焼て之を誦し日毎に一二卷を聞し是より冬に至りて悉く讀了り給ふ。是に於て佛敎の説く所に從ひ帝に奏して毎月八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日を六齋日と爲し此日は梵天帝釋が下界に降りて國勢を見とほす日なれば仁慈の心を以て殺生を禁せられたしをばせられたれば帝は悦んで勅を天下に下して此の日に殺生を禁せられしこと太子十歳の時姪夷數千邊境に寇せしことがあつた。天皇群臣を召して征討の事を議し給ひける時、太子傍に座して耳を傾け給ひ、群臣の議するがやうにたゞ討伐を事とするも徒に人の命を滅すばかりである、それよりも先づ魁師を召し重く教諭を加へ重鎮を賜ひて之を懷柔するに若かじと奏聞し給ひければ天皇之を嘉して蝦夷の巨魁綾羅等を召し旨を諭し恩を加へれば幸に事無きを得て其の後久しく邊境を侵さぬこととなつた十一歳の春の日太子は童子三十六人を率て後國に遊び給ひ、左右に各二人を侍せしめ更に各々四人を侍立せしめ、而して殘る廿四人を兩分して殿前に對立せしめ各々一齊に聲を發して其所思を高らかに唱えさせられた。童子等悦び樂しみて或は戲言を放ち或は眞實を吐くに、聲に長短あり高低あり、其を太子は明らかに聽分け給ひて毫も違ふ事がないので孰れも成服せぬはなかつた。

十二歳の秋七月百濟より日羅と云ふ倭人來朝した。非常な剛勇な方に身より光を放つは火焰の如くであつた。一度太子を見て其威神に驚き御前に跪つきて敬禮救世觀世音、傳燈東方聖散王と讚なされた。未完

●御上人様は唐澤山の御別時の後四五日を上諏訪で御過しなつて、本月の一日から十五日迄半月の長きに亘つて當松戸教會に御滞在下さいました。其の間は無倫例に依つて終日佛畫の御染筆にす暇もありません而も毎夜の御説教は勿論の事、畫筆を御働かせの傍色々と御講下され、そのお暇には原稿やら御手紙やら實に傍で見る目も畏多い事でありました。

●唐澤山の御別時參加人員住所氏名は來月號に發表致します。

三身の聖歌

山崎辨榮

法身の讚

一 仰ぐも畏こき阿彌陀尊
摩訶毘盧遮那と號ては
六大無礙なる 靈體は
遍ねく時空に亘りては
世々のあらゆる諸佛と
乃し生とし 活く物の
されば一切の 諸佛も
如來不思議の 靈徳を

二 毘盧は宇宙の王に在し
天地萬物の物をみな
一切の智慧と 能との
即ち因根の 律として
あまつみ空に列なりし

三 一切萬法の 則として
統攝ますなり畏こくも
秩序正しき爲しますも
世界の衆生を生成せり
歎へす星のめぐれるも

報身の讚

一 報佛不思議の 境なる
雲にそびゆる 宮殿は
琉璃 寶石の 莊嚴の
寶の池には 水澄みて
七重のうゑきに網覆ひ
寶の蓮花は地に満ちて
ひかりに化佛現はれて
阿彌陀 無量 光王尊
相好圓滿 したまひて
無數の菩薩は法の身に
如來を繞りし 裝ひは
世尊大衆のなかにして
清風寶樹を吹きぬれば
あまつ乙女は雲を分け
妙なる花をあめふらし

二 無明に迷ふ子らがため
法障菩薩の 迹を垂れ

三 生と活ける物はみな
佛は我等が 父なり
梵くは至大に設備ては
聖旨の程ぞたふどけれ
權と清けき 鋭氣もて
ミオヤの恩寵いと深し
靈性 本自 具よれば
聖旨 契ふ子とならん

應身の讚

一 舍那圓滿の 阿彌陀尊
八相應の 迹を垂れ
先づ出初めて雲居なる
天地よろづの 民草に
地に出てはカピラエの
時を待みてたましむるを
うづき八日の長閑さに
降誕ます聖子の初聲は
一切の善事遂ぐるてふ
圓かにそなる相好は
學の園生にのぞみては
技藝の林にあそびては
四門の遊びに仇し世の
天の 下を 統治めす
人の倫とて 妹と背の
最と睦まじき園の門に

二 靈を忍土にわかちては
釋迦牟尼佛と號けます
兜史陀の内の宮居には
めぐみの露を濕はし臥
淨飯王を 父とし
摩耶の母胎に降します
ラビの園生の花のもと
天と地とに 響きしと
悉達多君とは名けらる
梵仙阿私陀を成かし、
五明四吠陀の花をめで
與樂の室に入るとかや
常なき相をさとりては
上なき位も避けたまひ
契り染ける耶耶羅と
王子の羅睺羅を最かと

一子の慈悲の割なくも
何成る苦毒を受るども
無量の願行 成就して
本迹不二なる 靈體を
無量光土にましまして
世界を照して 念佛の
衆生 至心に 信樂し
恩寵のひかりを蒙りて
光に遇はば、罪も消え
身心ともに 安らけく
信心 眞に 得る人は
聖旨に契ふ子となれば
いよ命の終りには
慈悲の面影観まつりて

二 苦海の衆生を救はん
忍んでつひに悔じとの
即ち十劫覺と現り給ふ
無碍光王と名づくなり
光明 遍ねく 十方の
衆生を攝取したまへり
佛の慈悲を 念すれば
便は信心なりぬべし
歡喜はなき覺はへて
消きこゝろに蘇がえる
有漏の依心は變らねど
法子の天職を務むなり
一切の障礙盡きはて、
聖き御もとに到るなり

こゝろの知見開くれば

上なき道の得ま欲しく
乾陟馬王に御されては
深山の雲を分け入りて
みづから巖を除ては
千里の霞を踏みのぼり
解脫の道に計ひしかど
尼連禰河のほとりなる
具さに苦行を積りては
こがねの流に浴みては
献ぐる乳を受けまして
伽耶の毘鉢羅の樹下に
ひすぶ脚蹴いかめしく
天つ塵羅が吹きおこす
青天牙かに照りわたる
臘月八日のあかつきに
無明生死のゆめさめて

きさらぎ八日の曉に
ひそかに宮を出ましぬ
たまの筋をのきすてつ
法の衣に 替えたまふ
アラ、ウドラの仙人に
意を得さで立ち去りぬ
縁の草しくそのふにて
六度のをを纏にけらし
サイナの女ナダバラが
頼に氣力をよみかへし
金剛座の こけむしろ
三昧の床に曳きしめぬ
百のいかづちむら雲も
月には障りあらざりし
明星 爪かに出しとき
無上正覺を得たまへり

を過らねばならぬと言ふ事はありませんか。)
第一、「必至無上道」此事を「必」に心
かけて居ります。免もすれば卑近なる事に取られ
て此の目的を忘れ去ることなきにしもあらざりと思ひ
ます。此の目的を忘るゝ故に努力「精進」は必然的
に起つて参ります。又此の目的に進む可念佛なるが
故に、樂(浮世の)以て樂とせず悲以て悲しみとする
に足らずと思ひますから、その生活は直ちに光明であ
り安樂であります。妄想妄念起る時は悲しみに沈まず
更に更に一層の奮起をうながします。煩惱起らず
正念を相續し得る時其處に安住せず、樂におぼれず
「無上道に至らんとするもの、かゝる低級なる處に安
心してサボタツするは墮落の第一歩なり」と又更に
に奮勵を起しませぬ。

第二、「人格の改造」眞善美の御國に安住せんに
は自己の人格が眞善美とならねばなりません。然るに
自力では絶望でありますから御念佛を致します。御念
佛は眞(不變)善(大善根)美(心不汚染)でありま
す故にお念佛を申して居ります。私自身が佛様の御力に
依つて法爾自然に眞善美となります。かうして漸々に
私自身の人格は彌陀の靈光に感化されて段々に人格が

信者の聲

必至無上道 (一證入信者の私信)

……私はまだ「求道中」のもので取り立て、
上ぐる資格も持ちません。然し乍ら御参考の一端も
ならばと思ひ私の心得方を申上げて見様と存じます。
御取捨は御自由でございます。(必ずしも同一の徑路

佛陀のおしへは正覺の
牟尼の法は、涅槃なる
世を度ふこと五十年に
應化の迹は狗尸那なる
まこと久遠 實成の
常恒に樂しき御國にて
願はくは我が 同胞よ
聖旨に仕ふ身と爲りて
安き御許にいたらなん
(終)

—(14)—

—(13)—

小島尊宿の質疑に答ふ

山崎 辨榮

二、既に客體と云はれ絶対とは相待に對する絶対の樣
に思はるゝとの質疑に對して。如來は三身一如にして
一方よりは全く絶対無限の靈體にして法界に周遍して
遺すこと無し、一面には相対的に大小無礙の身を示し
て衆生の様に應現す。佛敎佛身は絕對にして亦相待應
現す平等と差引何れも一方に偏するを許さず。此義華
嚴經等に備在せり。また西洋の宗教哲學の「客體な
る神の絶對無規定なることを感に主張するあり。能く
研究し玉へ。

質問應答欄

三、如來より出し我等が何故に如來に歸命すべき哉の
答に謂く。本如來藏より出でし本性を有するが故に如
來に歸して本居の宮都に還ることを得、如來藏より出
て、衆生が歸元の眞理に迷ふが故に六道の化郷に彷徨
して出離する能はざるなり、導師の一到彌陀安養界へ
來是我法王の能、また歸なん去來魔郷に停まるべから
ず等の文見つべし華嚴五教章に經を引一切衆生本法
身に生じて法身に歸らざるはなしと、若本源の如來
に歸命せざれば六道の迷郷に迷はざるを得ぬ故に本覺
の源に還らんが爲に如來に歸命するなり。罪惡の淵源
に就ては次號に譲る。

祖山の御別時

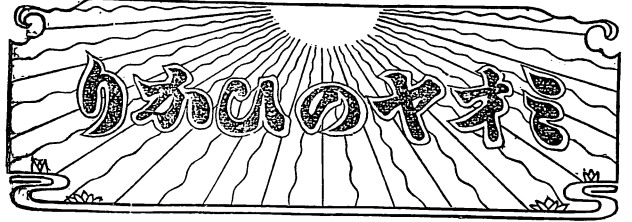
來る十月十六日より二十日迄五日間總本山知恩院勢
至堂に於て山崎辨榮上人指導の下に別時行儀三昧會を
修業致候間參會御希望の御方は左記の各取御承知の上
申し込み下され度此段御案内申上候也

- 一、道場の静肅を保つ爲め人員を制限致候間御希望
の方は十月五日迄に總本山知恩院寺務所桑田寬隨
宛御申し込有之度事
- 二、本山内に宿泊を望まざる方は食費等の質費(約
壹圓)を申受くること
- 三、遠來の御方は十五日迄に御登山の事

編輯部より。前月號は大變に發行が延引しまして、
まことに申し分けがありません。御心配の餘り御書
迄頂戴致しました方々には一々御返事も差し上げま
さんでしたが此處に既く御禮申上ると同時に、皆様に對
しまして深く御詫を致します。今後は間違なく發行を
致しますから御安神下さい。今度都合で發行人の名義
を變更致しましたからそれも御承知下さい。尚御斷
りしなければならぬのは紙張の都合上本號には土屋上
人の御原稿を掲載する事が出来なかつた事でありませ
ん何卒次號迄御待りを願ひたいと存じます。

—(16)—

—(15)—



號二十第卷壹第

「空海が心のうちに咲く花は彌陀より外に知る人はなし」此歌は弘法大師の遺訓と傳へられてゐる。何人の歌でもよし此遺訓の如くに信心の花が開く時はミオヤの彌陀に知らるゝ人ごゝる。さうなれば此方からも眞にミオヤを信じて中心から彌陀を慕はしく感じらるゝやうになる。宇宙は本より大ミオヤの所有である。總ての生る物は皆其子である。然れども生れたまふ人は佛の懐に於ての生るはミオヤの在りませうことを知ることはできぬ。ミオヤの慈悲の懐に於ては、められて信心の心が解ゆる時始めてミオヤの愛護を被むるやうに爲得らる。然らばいかにせばミオヤの慈悲にあたりぬるやとなれば、經にミオヤの慈悲の光は遍く十方の世界を照せども念佛するもののみを攝取して捨てたまはぬと。我ら念佛してミオヤの光にあたりぬるは、信心開けて佛の蓮子と爲ることが出来る。已にさうなる時はナムアミダ佛と時々親鸞はコッコと呼びかはやうになる。かように我等信心開く時はミオヤに知られておる人となる。卵のまゝでは親の愛のうけやうはない。願はくば我同胞の衆、狭く信心の心を開きて佛の蓮子となりて彌陀より外に知る人はなしと自信の立つやうに爲てミオヤを慕ふ子としてミオヤの愛護の下に價値ある日ぐらしを爲すやうにならまほしきに御すしめ申すにぞ。



南無の二義

山崎 辨榮

南無と云ふは佛敎にて自己は罪惡苦惱の凡夫、自己の力にては解脱も成佛もできぬ者なれば之を救済して下さる自己の信する神佛に對して我全生命を獻げて信頼する至心を表はす言であります。今は我が一切の神明に對して最尊たる、大慈悲の父なる阿彌陀佛に對して己が全生命を獻げて救度を請求する至心を表はして南無阿彌陀佛と云ふのである。此には自己の最大の要求ありて、すべてをあなたに投込でしまつて救ひを仰ぐのである。南無とは梵語にて種々の譯があるけ

れども今は先づ二義を以て阿彌陀佛に命を歸して信頼する意義を述べんとす。

一、我を救ひ給へ

二、我を度し給へ

この二義である。前のは自分は若く、空で無常、無我なる生死の苦を生れ乍ら有ておる凡夫にて自分の力では解脱できぬ者なれば、如來の大慈悲の力を仰て常住安樂の中に救ひ下さると云ふことにて、後のは、我は罪惡深重にて弱點のみの自己にて、自分の力にては至善圓滿なる佛に成ることのできぬ者なれば願はくば如來よあなたの御力によりて我をあなたの御子としての靈徳を成就させて下さると云ふ意である。また前のは自己の生命を全く如來の中に投込でしまつて、永遠の生命の光明の中に生れ更らして戴くこと。後のは既に如來の救を被り心が生れ更りて光明中の我として光と力を被りてあなたの聖意をば此身を以て酬らざるに現はしてゆくことである。即ち人格向上を仰ぐ意義である。この二者の要求は哲學者のカントが謂ゆる最

幸福と、最高徳を要求することである。カントが此世では最幸福と最高徳との兩方を完全に備へることはできぬ。最幸福と云はば健康で富家で名譽ありすべての物質的の満足を得る者を云ふ。此に至て幸福な人として必しも人格の圓滿なる道徳家と云ふ譯でなく、亦最も人格の高い道徳家とて必ず富貴なる長壽なる幸福な者と云ふ譯にゆかぬ。神の國に於てのみ最幸福と最幸福とが完全に具備することが得らるゝ。神に於てのみ得らるゝ。南無の二義なる、救我と度我とは此の二者の要求を意味す。救我は此生死の苦に沈むべき不幸な我を救ふて永劫の光明中に最幸福な我にして戴きたいと云ふこと、度我とは此弱點の甚しい罪惡の我をあなたの御力にて聖意にかなう人格に御育てを仰ぎますと云ふ意味である。

救はれた身となる。

救我の我に、未だ救はれざる我と救はれた上の我とは天地雲泥の差がある。生れたまふの我は、肉の我動物的の我にて、人間てふ狡猾な罪を送る我、神心を煩悶し惱亂する我である、有ゆる動物中に最も精神の煩悶や苦惱の多いものである。而して世の文明に進めば進む程心の煩悩が重くなるのである世の凡愚の人は唯物質欲の満足を得れば幸福は其中に在るものと思ふておる。人生自覺のなき者の物質的の満足は遠て己を苦しめる本であることを知らずして、金銀財寶必すしも人生を幸福にするものでない、凡愚物質欲に満足を得て之を以て至て幸福と自からさめておる。動物性に甘んじておる族の如きは人生の意義を語るべきものでない、苟しくも人生の意義に對して心意を注ぐに到らば、必ず人生を精神的に價値を發見せんとすべきである。

我教祖釋尊が若くして玉宮に在りし時、人生問題に痛く煩悶したまひ總令王位を履むとも老病死は免る

たいと、また最高徳なる佛に成り度いからあなたを以て無限に向上させて戴きたいと云義である。而して今如來の光明の中に心を生れ更りたる時は必しも命終を俟たずとも精神的に其分に應じて此二者の要求を満足して下さるの如來が私共の信仰に報ひ下さることである。其意味を是から説明します。

我を救ひ給へ(我に最幸福を與へ給へ)

我を救ひ給へとは大慈の父よ、私は今罪惡深重なる者にて現在にも未來にも、身心共に苦しみ惱み、種々の憂愁恐怖煩悶のつひに止むことなきものであります。未來も地獄の炎に燒るゝ外なきものなれば絶対たるあなたの御力によりてあなたの大慈光明中に救ふて戴き永遠の生命として活かし下され。私は全生命をあなたに獻げて投込でしましむ故にあなたは我をあなたの所有として助け下され。此罪と惱にて永劫淨ぶ潮なき我をあなたの聖意に投歸してしまふてからは、今迄の自分と云ふものは認めませぬ。此に於て有ゆる罪も業も悉く大悲の光の中に融込でしまふて全

こと能はず、いかに富四海を保つとも、無常と苦空とを遁るに由なし、人生の苦、生死の惱はいかにして之を解脱すべきものぞと、此が皇太子をして、尊き王位を破散の如くに捨て上無き榮花を價値なきものとして入山學道してつるに臘月八日の曉に、人生生死の重荷を捨て常樂永恒の光明界に入りなされた動機であつた。釋尊が人生の重き苦悶を解脱して、彌陀佛の光明中に神を安住するに到りしは、これ宗教的に云はば、彌陀の光明に救はれたる状態である。何人も未だ救済の實を得ざる間はよしや物質に満足を得やうとも精神には眞の満足と眞の幸福を感ずることのできぬ。

先日或、求道者に問ふた、あなたは自己精神中に總てのことを暫らく放棄してしまつて全く赤裸々の我に爲て見た時に何の感じがしますと、其人の曰くそう云ふ時に何となく只不満と不安とが感じられますと、ごなたでも正直に告白したならば、これに歸するものであると思ふ、赤裸々の我に不満と不安との感じのない

と云ふは外部のことに紛れておるからで、自から知らずしておるのである。

赤練の我に不満と不安の感あるはこれ何人も宗教を要求する性能が具はつておるからである。人間の思想や感情は云ふものは世の外界の事に紛れ易いものである故に、是非宗教を求めて、ミオヤの救を受けて始めて真の赤練の我に満足と安心とが得らるゝのである。先年ある村の村長に對して宗教を求め王へと勸告したけれども、村長氏は自分はどう考へても宗教の必要を感じることが出来ないと答へた、漸く一年経たず年再び會ふ時は、前とは全然替つて自分の方から切りに道を求める心が熾に起つてきた。それは最愛の女に先だれた爲であつた。若し全く人の性情に缺處なくば最愛の乙女が死なうとも自分が死の宣告を受けようとも或は驚怖、或は悲傷する筈は無からう。然るに、此の場合に臨む時は何人も怒りに感情に缺處の現はれ来り、或は驚怖し、或は哀悼に耐へぬ感起り来るに相違ない。これ何人も、ミオヤの救ひを求むべき性情を具有する。

その光に融合して全く救はれた身となる時は、今迄の罪と懺の我でなくて盡十方無碍の光明中に天地廣く日月永く常樂我淨の國には眞善微妙の花匂ひ、法悦の樂しみは是れ如来他受用の妙用にて神悦の歡びは是れミオヤと共に受けるミ子の情となり、永遠の生命と常住の平和はミオヤの中に一切の子等と共に享受する眞の幸福と感じらるゝ。

已に救はれてからは身はまだ娑婆に在るも神は淨土に迎はるゝ、肉眼では昨日に替らぬ憂き世の中も、心眼を以て見る時はこゝも即ち安樂の都、蓮華藏の世界と感ずる。我等は生々の習慣世々の餘習氣に食はざれば恐も發せざるを得ぬ、然し心に念の炎の中にも心の前に大悲の面影を含んで在ますと想ふ時は念の炎も自づと消ゆる。或は悲哀に襲はる時も、口に我を救ひ玉への南無の前には、彌陀大悲の親様が無限の慈悲を以て慰安して下さい、有難さに充ちられて悲しみも轉じて菩提の縁となる。すべて何なる若しみも惱みも如来の慈悲の中に融合ふからは永生の樂と化す、已に

する兆候である。未だ救はれぬ我には、外界の眼前に自分を眩惑するところの眼や耳また口腹の快樂などをさけて赤練の我と爲す時は何にも我に慰安するものもなく内容を豊富に樂しましむるものもなく、只不安や寂寞の感のみであらう。而して過去を顧み將來を慮り取越苦勞や種々の憂愁や、恐怖は常に襲ひ来りて我を悩ますであらう。凭る時に天にも地にも彼が心に入り来りて彼が總ての悶や惱を取り去りてえも云はれぬ天界の歡喜と妙樂とを齎らし来りて慰むるものはない。故に未だ救はれざる我は實に不幸なものと感ずるのである。

救はれた上の我、先の我は人間の子としての我、煩悶や苦惱を集めて我としてをつた故に、外界の僅の刺激にも直に破裂して、自ら苦しむ惱む性質を以て充滿してをつた、今度は從來の生れたまゝの我は實にあてにならぬもの、又苦しい我なるを自覺して始めて大悲のミオヤに歸命して永遠の救ひを求めた譯である。いと狭い惱の我を絶對無限の大悲の光明中に、投込んで

救はれし上は無限の光明中に無上の幸福を感じらるゝ。されば形は娑婆に在り乍ら神は常樂の光明中に安住す。其光明に只自己一人のみではなく大ミオヤの中に世の總ての同胞と幸福を共にするのである。

何にせよ救はるゝか、諸君は上の如くに已に救はれた上には身は此土にあり乍ら心は常樂の光明中に眞の幸福の日晝し出來うと聞く時はごなたもその希望が發するであらう。然らば如何にせば救はれることが得られようか、問ひなせう。此救を得る道に二道あります。

一、に開信 二、修信

開信と云ふことは、實には健全なる信仰の道ではないが、眞宗には連りに唱へてをる故に暫く之を許して信を得るの一途とす。開信とは即ち知識の教を聞いて能く其安心の趣旨を徹底して全く光明を獲得すること。二に修信とは一心に念佛して直に彌陀の光明に觸れて慈悲の中に融込で光明中に安住すること。初めの開信は眞宗にては能く彌陀の慈悲を聞いて、信心の眞

(5)

を得る時は觀喜の一念に無爲金剛の信を得ると云ふ。また信心は凡夫の心に非ず、佛心である、其佛心が凡夫に授けられ玉ふ時に信心獲得したものである。亦信心獲得とは第十八願を心得ること、即ち南無阿彌陀佛を心得るのである。南無と歸命する一念に發願回向の心、如来より凡夫に回向玉ふのである。此時凡夫無始の惡業悉く消滅し正定聚に住し煩惱を斷せずして分に涅槃を得ると。若し此に到れば既に救はれたる相とす。救我の方面にのみ勸むるの眞宗の傳道である。如何に口に稱名すとも全く自己を缺けて如来の眞を得ざれば無効に歸す。已に信心獲得してよりは只報恩のために稱名すべしと。救我の方に就ては淨土宗の主眼よりは眞宗の方が勝れたるやに思はる。

淨土家の勸むる處に依れば、若し之を劍道を學ぶに例へば、平常の念佛は劍道の稽古やまた試合にして、臨終の念佛のみ眞劍である。たゞ平生いかに習練を積むとも、若し臨終の眞劍にして敗を取る時は平生數十年の念佛も悉く水泡に歸す。眞實の救を得るの事

聖徳太子の傳

太子十三歳の時秋九月に鹿深臣が百濟より彌勒の石像を持ちて歸り、父稻目志を繼ぎ佛敎の信仰深からざる大臣蘇我の馬子は其の佛像を請ひ受け、また人を遣はして諸國に佛道修行者を求めしめた。その使者が播磨國に至りし時、比丘に似たるものを見つけたし問へば答へて曰く、この地方は沙門を敬はぬに因て俗に混じて生活するのである。とそれが高麗の名僧慧便が還俗してわたるのである。その由を大臣に報せしに迎へて師とせられ、夫より司馬達的女島と漢夜善の女と曰ひ聖を禮藏尼と曰ひ石を禮善尼と名づけた。馬子は厚く三尼を崇むるの東に佛殿を建立して彌勒の石像を安置し、三尼を肩請して齋會を設けた。是が我が國の尼僧と尼寺の始めである。吾國の佛敎の法の門は婦女の身より開かれた。

また馬子は山府の石川宅に佛殿を造つて毎に到りて

實は正に臨終の一刹那に在り、是れ淨土家の安心である。感りければ今現に淨土家の傳道家と雖も、自分は平常、念佛するもの、往生を得るや否は臨終の後でなくては未決定である。臨終の往生が即ち救済の實である。故に淨土家の傳道家は、平常はいかに念佛するも救はるゝや否は未決定であり、夫が信心歡喜とか、また感謝念佛と云ふことは謂れなきことである。故にも偶々念佛者にして歡喜とか感謝と云ふ語を聞く時は彼等は之を遠安心として排斥する。亦甚しきは念佛は唯死後の爲にのみ唱ふべし、現に如来在りますと直接歸命の想を以て念佛する如きは宗の本意に非ずと折る譯なればある淨土家の勸方にては我を救ひ玉へと云ふ念佛にて救を得るは臨終に拘はるものとす。教祖釋尊法然の精髄を仰ぐ吾人が我を救ひ玉へとの念佛は其趣を異にし、我等は必ずしも、臨終を待たずとも今日より疾く救はれて光明の中の人となるべきことを勸むるものである。(未完)

敬禮せられた。太子は幼にして既に佛法を信じ經にも通じ給ひければ、馬子が大臣にして佛法を奉ずるを見て深く之を讃め給ひ時々微行して馬子が造營せし佛殿に詣てて供養をしたまひ、且馬子にも佛法の功德を説き共に佛法を盛隆して世を救ふことを謀り給ふた。

太子十四歳の春、蘇我の大野嶽の北に塔を建て齋會を設けしに、司馬達は佛舍利を供養して夫を馬子に献じた。馬子は佛舍利の功德を感じて塔の中に納めて崇拜した。するとこの年に國中に疫病が流行して馬子も亦其病に感傷した、そこで天皇に奏して佛に祈らんことを願ふた。然るにこの敬造天皇は文史を愛して佛法を信じなさらぬのと又當時排佛家が多くありて物議紛々であつたので天皇は太子に對して、我國は元神を以て主として來りしに今大臣は異國の神を祭らうとするは如何であらうかと太子は、諸佛世尊の教は其道微妙にして神も其意に違ふ筈はなければ是支のなきのみでなく遠く國家の爲に目出度ことに候と奏上した。尙馬子は勸許を受けて石像を禮拜して祈られたが疫病は

(6)

(7)

益々諸國に蔓延して人民の死するもの甚だ多い。すると平常から蘇我家の反對なる、大連物部守屋は中臣勝海と共に天皇に奏した。先帝已來陛下に至るまで諸國に疫病絶えず益々甚しきに至り民も絶盡きんとす。是全(蘇我の臣等が異國の神なる佛像を拜みなどするのを八百萬の神々の怨に觸れるのである。願はくは疾く昭して佛法を禁断したまへと、天皇は速に勅許せられた。一方に太子は奏した、守屋勝海等は未だ因果の理を識らず禍福の道を辨へぬ故に濫に罪を佛法に歸するなり。善を修せば福至り惡を行へば禍來る。是自然の理にて佛の教である。何ぞ時刻りて行はれんと爲る佛法を妨げんとするは却て禍を招くのである。奏し上げたけれども守屋等は勅許を得たことなれば、かねての排佛の志を達するは此時にこそと、暴力を以て堂塔を斫り倒し佛像を毀ち火を放ちてこれを焚き、燒き残れる佛像を難波の堀江に棄て、加多之の三尼を捕へて法衣を奪ひ杖を加へて之を辱かしめた。太子はこれを聞きしめ深く慨かき王ふた。馬

子の大臣も餘りのことに歎き悲しみ守屋等を怨み憤つたけれども何共致し方がなかつた。守屋等が恣までに佛像を毀ち寺を燒等のことをなしたけれども、疫病の恐むべき様もなく却て流行は猖獗であつた。世の老少等はこれぞ佛像を燒きし罪報なれと謂ひ合ふた。此時に天皇も守屋も同じく疫病に罹られたのである。馬子の大臣奏して曰く、臣が疫久しく癒されば願はくば三寶に祈らむと、天皇は既に太子の奏聞を聞きしめ且つ疫病の甚しきを憂へて大臣の奏請を許して、汝獨り之を爲せ他人を惑はす勿れと、詔し玉ひて三尼の禁錮をも解きて、大臣に授けられた。馬子は歡び更に精舎を營みて三尼を供養せられ、太子も之を賀して大臣の威を以て能く佛法に力を盡せば興隆の功必ず擧るべきことを讚美なされた。太子の當時朝に在りて勢力を争つたのは蘇我と物部との兩家である。共に朝權を執つた。物部氏は遠く隨連日命から出て雄略の朝に大連となり、伊賀佛より後裔守屋に至り、蘇我氏は武内宿禰の裔で稻目より馬

子に至り、稻目は實化天皇の世に大臣となり、其女堅鹽媛は欽明帝の妃となり七人の皇子と六人の皇女とを擧げ用明天皇も敏達天皇も其子である。悉く蘇我氏は皇室の外戚と爲て非常に勢力があつた。欽明帝の朝に百濟より佛像等を獻じ表を以て佛徳を讃嘆せしに欽明天皇いたく之を嘉して、朕未だ是の如きの妙法を聞かざりきと。日本に新たに佛敎の入來るや之を採用すべきや否やは國家に取ての大問題である之を群臣に諮ひ評議にかけた。すると稻目の大臣は謂は開進主義にて、早くより外國の佛敎を聴き傳へてあれば高敎の念を起して之を歡迎して是非御採用になるがよろしいと、奏したが一方の物部の尾輿等は守舊主義にて未だ佛敎の何なるを知らず、ただ外來の異敎を嫌ふて切にかゝるものを御用ひになると、日本の神々の怨に觸るに依て御採用ならぬ方が然りと論じた。朝議が二派に分れたので、天皇も之を強て廣めよと宣はす佛像をば稻目の大臣に賜ひて、汝獨りこれを禮拜せよと仰せられた稻目は大に悦びて小梨田の家に佛像を

安置し、向原の家を捨て、之を寺となした。そこで蘇我と物部兩家は、信佛家と排佛家とにて、開進と保守との二派に別れて軋々甚しかつたが、稻目は欽明の三十一年に薨去し、尾輿も税なく率した。敏達天皇の御代に大連は弓削の守屋にて、大臣は稻目の子馬子であつた。馬子は父の志を繼て佛法を信じ、守屋の方もまた父の志を受け佛敎を排斥した。愚れば將に言行はれんとする佛敎も政治家の朝權争奪の道具に使はれるやうになつた。佛法の何たるを知らず黨流争ひの爲に妄りに排佛せんとするもあり、また一方には佛法は尊とすべきは信じて公に歸依の志を發表するこの出來の輩もあつた。(未完)

◎故淺井上人の一週忌に參じて如來の慈光を宣傳す

土屋 觀道

身體の健全も大切である。私は之を望んでゐる。然し乍ら之で満足はできぬ。私は夫よりも尙大なる望がある。夫は身體を屠して尙惜かぬ價値の生活であります。そこに私は生存の意義も見出さぬ。生命の要求もつまりは價値の生命とならねばやまぬ。否價値こそ眞の生命といふべきである。そこに眞理がある。眞理と云へば何事も眞理でないものはない。然し乍ら眞の眞なるもの、今こゝに私が云はんとする眞理は眞偽と對する相對的の眞理でなくして、絶対的眞理としての價値の眞理をいふのである。私の要求する眞の眞理は我全身を獻げて惜からざる價値の眞理であります。否我全身を以て爲さるを得ざるものこそ眞の眞理である。私は之に依て始めて生命あり價値あるの自覺としての眞理を要求して止まぬものである。而し

がこもつてゐる。而も吾人はあくまでも向上を要求し又あくまでも完全を望むのである。然るにもかゝらず吾人の求むる此の眞善美は如何にして得らるゝか。吾人は直にこの眞善美の根本にまで達したいのである。而かも之を主客、自他の上にも直に徹底させたいのである。眞の極まる處に人生の意義が発見せらるるのであります。そして眞の善美の行動もこの眞よりして始めて開けらるべきである。永遠の生命も價値の生活もそこに吾人の求めて止まぬ本具の要求があるのであります。然るに世人この道を得たるもの幾許ありませうか。私の目的は要するにこの一つにある。そこに眞があり美があり善があるのである。客觀的に云ふならば、私はかゝる理想地に達したいのである。主觀的に云ふならば私はかゝる理想地に達したる人となりたのである。而してこの要求たるこれ單なる吾人の要求にあらずして、目前にせまされる切實なる私の根本的要求として之を事實の上にも求めるのであります。然るに現實の世界はどうであるか。私は主として生死の中にある。そしてこの間、はたして無限の向上に生つゝあるかを反省すると、そこに人生の矛盾がある、若懂がある。かくて私を理想に照せば照す程私の

三、救の主

私は初め神の何たるやも亦佛の何たるやも知らなかつた。然し乍らかたてより耳にせし爲でもあるか、私

信者の聲

弟の死に據りて實見せる如來の威徳

長岡光明會員 佐藤徳三郎

大ミオヤの御慈悲極りなくして、常に我等一切の衆生を愛撫し導き給へる有難き佛敎の聖旨に就きまして

神聖

(爲ヲ照見ノ智慧)

大ミヤの聖きひねに契るは人の心のまことなりけり

偕て愚弟の病は初めより重症で世の同病の實例によれば恢復は困難に見受けられ、遂に最善の治療努力も

(13)

(14)

變じて喜びの涙に咽びし次第であります。愚弟の行年

へます。斯く喚起されたる信仰心、即ち如來大悲の救濟を求めんと欲せし一念發起は自ら病床時の修造觀念

生前健康時に於ける修養が最も大切と感ずる所以であります。況して佛敎の聖旨は現在を通じて最も徹底的

(15)

大正九年十月十五日印刷 編輯人 岩品誠信 印刷人 秋場熊太郎 發行所 光明會松戸教會所